

2005 5 16

絵本学会NEWS No.24

発行：絵本学会

発行日：2005年5月16日

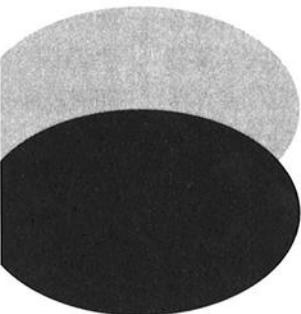
編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒305-8574茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学芸術学系図書研究室内

Fax.029-853-2846

<http://ehongaku.musabi.ac.jp>



絵本フォーラム2005の開催

研究会報告

討議：「書評」をめぐって

絵本関係展覧会イベント インフォメーション

事務局からのお知らせ

・紀要投稿論文募集

・研究助成申請について

絵本学会

「絵本フォーラム2005」開催

絵本学会主催の「絵本フォーラム2005」が、7月30日(土)に東京の世田谷文学館で開催されます。絵本フォーラムは、さまざまな分野で絵本に関わる人々が集まって、日頃の実践や研究を踏まえて自由に意見交換する場です。会員の皆様の参加をお待ちしています。

●絵本フォーラム2005

童話の世界を描く絵本（仮称）

日時 7月30日（土）10時30分～16時30分

会場 世田谷文学館

主催 絵本学会・世田谷文学館

今回のテーマは原作が既にある童話（一般に古典、名作童話と呼ばれる）の絵本化についてです。このジャンルには宮澤賢治、小川未明、新美南吉などの童話を原作とする定評のある絵本があり、最近では酒井駒子『赤い蠟燭と人魚』（小川未明作）、シャーロット・ヴォーク『エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする』（エリナー・ファージョン作）が話題となりました。しかし、童話絵本は安いな絵本化が多いのもこの事実です。童話の世界を描く絵本は、原作だけで充分楽しめる文学作品を素材として絵本化するために生じる難しさがある反面、絵本化によって読者の幅が広がり、宮澤賢治原作の絵本のように、同じ作品を異なる絵本作家のイラストで楽しめる面もあります。今回もさまざまな立場から活発な意見交換が交わされることを期待しています。

第一部 話題の提示 10時30分～12時00分

今回の絵本フォーラムのテーマ「童話の世界を描く絵本」（仮称）について、それぞれの立場から問題提起をしていただきます。

*作家の立場から

黒井健（絵本作家）

*編集者の立場から

小野明（絵本編集・装丁家）

*研究者の立場から

鳥越信（前・聖和大学大学院教授）

第二部 談話サロン 13時30分～15時00分

三部屋に分かれ、第一部の話題提供者を囲んで、互いに語り合うひと時です。

第三部 座談会・情報交換 15時00分～16時30分

話題提供者による座談会と参加者の情報交換の場です。

参加費（資料代）：1000円（絵本学会会員500円）

定員：150人（先着順）

参加申込方法：

往復はがきに住所、氏名、電話番号、会員・非会員、
参加談話会（黒井、小野、鳥越）を明記し、7月19日
(火)までに下記へ

申込み・問合せ：世田谷文学館「絵本フォーラム」係

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10

京王線芦花公園駅徒歩5分

tel. 03-5374-9117 fax. 03-5374-9120

研究会報告

● 「小林敏也さんを囲んで—絵本表現研究の集い」

日時：2005年3月12日（土） 午後1時～3時30分

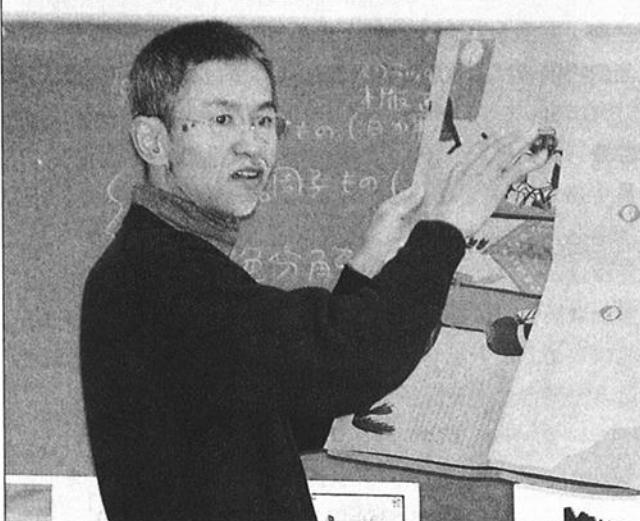
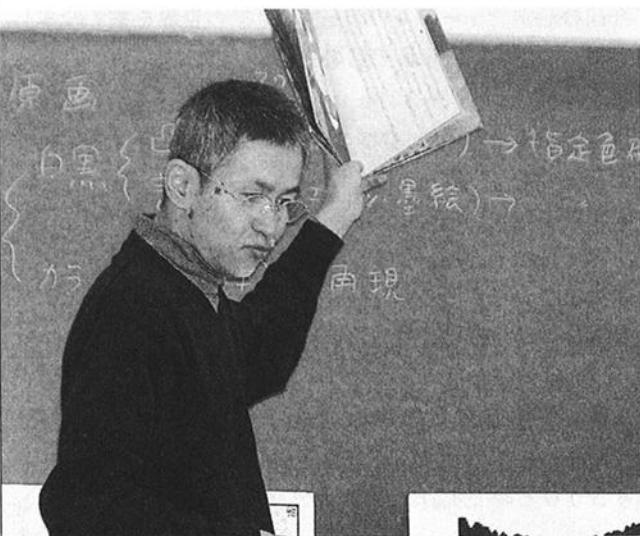
場所：文教大学

主催：絵本学会

絵本研究をするにあたり、技法や作家の方法論を体験してみる試みとして、イラストレーターの小林敏也さんを迎えて、スクラッチボードを使った実習が行われました。

実習の前に、小林さんからスクラッチボードを始めたきっかけや宮沢賢治作品との出会い、作品制作や印刷、紙などについて話しをしていただきました。

小林さんはこれまでに宮沢賢治の画本（えほん）15冊と詩集2冊を出版しています。これほど宮沢賢治の文章に深く関わることになったのは、谷川雁さんの「個人的なイメージを押し付けない」賢治についての文章を読んだことによるそうです。この「個人的なイメージを押し付けない」という姿勢を、小林さんは賢治のテキストをイラストレーション化する時に常に意識し続けているそうです。



また、スクラッチボードに興味を持ったのは、司修さんの作品からでした。スクラッチボードは、紙の上に白い陶土を薄く塗り固めたものです。その表面を黒く塗って引っ搔くと、削られた部分が白く出ます。まるで闇の中から光を削り出すような作業に、映画的な面白さを感じて魅せられたそうです。

こうして削り出された原画は中間調のない白と黒の2階調でできているので、色分解なしの版下として使用できます。これに色見本を使って、全て特色の指定をしています。印刷には一般にプロセスカラー（4色分解のイエロー、マゼンタ、シアン、ブラック）によるものと、特色インキ（はじめから特定の色に調色されたインク）を使って刷るものがあり、小林さんの作る画本は、特色を2色ないし3色重ね合わせたものです。「折」によって2色のページと3色のページに別れ、全体で変化を持たせています。

直接彩色する場合と違ってイメージにズレが出ることがあるため、印刷の刷り出しには全て立ち会っているとのことでした。また、色付きの原画を印刷する場合と違って、原画の再現性を意識しないですむこと、地色のついた紙なども自由に選べる、などの利点もあります。これは、むしろ一般的な印刷よりも版画を摺る作業に近いかも知れません。

折ごとの色彩計画はミニチュアのカンプ(comprehensive)を縮めた略称。完成品のひな形)を作つて立てるということで、幾つかの見本を持って来て見せてくれました。折を確認するためのカンプでもあるため、本来はページがばらばらに外れるのですが、使い終わった後にきちんと製本してあったのが印象的でした。また、参考資料として、校正刷りも何枚か持参してくださいました。中に、本来裏表に刷る2色ページと3色ページを重ねて同じ面に刷ったものがありました。最初は紙の節約のためにそうなったらしいのですが、本来意図していなかったインクの重ね合わせが確認できて、かえって勉強になったということでした。

小林さんは、絵と文字の関係や、本文はもちろん帯の紙質まで、全て自分で決めているそうです。画家とデザイナー、編集者の役割を兼ねた作業を行っているわけです。持参してくださった校正紙の中に、腰の強い頑丈そうなクラフト紙があったのですが、本来はセメント袋に使う紙で、イメージにあうものを捜している内に見つけたそうです。実際に印刷の現場に立ち会うことで、紙を変えた時のイメージをその場で確認できたり、本来なら印刷のやれ紙（試し刷り等の廃棄する分）が勉強になったり、というお話を聞いて、自分の眼で見たものや手で触って確認したものの大目にしていることがうかがえました。

■スクラッチボードを使った実習

用意したもの：

スクラッチボード Gペン カッティングペン

スクラッチボードは本来、紙の表面に約0.5ミリ厚ほどに陶土を塗り固めたもので、鉛筆、墨汁、製図インク等で色を塗って使うものでした。現在は品質の違いによって何種類があり、値段にも差があります。今回は、ネオスクラッチボードというアクリルボードに樹脂インクを塗装した、比較的安価なものを使用しました。最も安価な方法としては、感熱紙をコピー機に通して真っ黒にしたもので代用できるそうです。

絵を描くための道具は、表面にV字状に溝をつけられるものであれば、針でもエッティング用の道具でも利用できます。ここではGペンとカッティングペンを使いました。

点描、線の幅を変えて描くという以外に、下地を作る方法を教えていただきました。これは、一度タテ・ヨコ・ナナメにスクラッチを入れて、その上に再び黒でコーティングをし、その上から引っ搔くと、細かな描写ができるという技法です。厚いスクラッチボードを作れば、さらに複雑な表現が可能になります。

白黒のコントラストのはっきりとした、シャープなライ

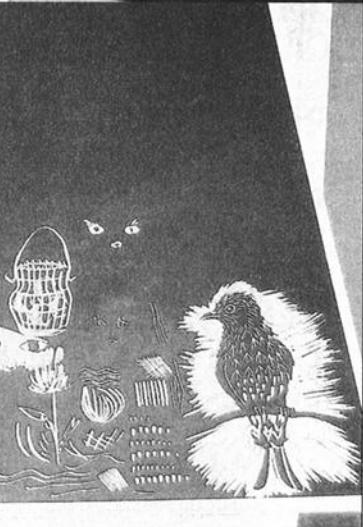
ンが浮き上がるのが面白く、実習に参加した20人は、しばらく夢中でペンを動かしていました。かねてよりスクラッチボードに興味があった、という絵本作家の黒井健さんも参加されていました。

今回は技法を試してみることが目的で、作品の完成が目的ではなかったため、時間通りに終了。その後全員が参加して、お茶とクッキーをいただきながら、実習の感想や、小林さんの作品についての質問、黒井さんへの質問など様々な話題で賑やかな懇親会が行われました。

追記

黒井さんから御自身も編集に関わった日本児童出版美術家連盟創立40周年記念出版『月刊保育絵本クロニクル』￥2,800（1927年-2004年の77年間に及ぶ月刊保育絵本を網羅したビジュアル誌）の紹介がありました。

(加持ゆか)



討議：「書評」をめぐって

機関誌『BOOK END』2号所収の書評をめぐって、本NEWS 22、23号で、谷本誠剛氏と正置友子氏の間で議論が交わされてきました。谷本氏は本年1月に病気のためご逝去されましたが、氏に身近だった灰島かり氏から、これまでの討議に関連して改めてご意見が寄せられましたので、ここに掲載いたします。
(広報委員会)

●正置友子氏に応えて

灰島かり

『子どもはどのように絵本を読むのか』(谷本誠剛監訳、柏書房、2002年、以下『子どもは』)に対する正置友子氏の書評(『ブックエンド』2号掲載)について、谷本誠剛氏が反論し(絵本学会NEWS No.22)、それに対する正置氏のさらなる反論がNEWS No.23に掲載されました。谷本誠剛氏は本年1月に逝去され、正置氏にお応えすることができなくなったことは痛恨の極みです。残されたこの本の翻訳メンバーのひとりとしては、正置氏の投げかけた問い合わせに答えねばならず、また絵本学会NEWSの読者の皆さんにぜひ知りたいこともあります。この場をお借りすることになります。

始めに私事にわたりますが、私の立場をお断りしておくと、私にとって谷本氏と正置氏は、ちょうど同じくらい親しく大切な方々です。お二人とも尊敬する先達であり、一緒に仕事をしていく仲間でもあります(ここではお二人に対して、敬称敬語を省いて語らせてもらうことをお許しください)。さらにお二人は共に率直なお人柄であり、私はこれまで何の遠慮もなく意見をぶつけあうという心躍る交際をさせてもらっていました。お二人の闊達さに感謝しつつ、『子どもは』の翻訳メンバーのひとりとして、心おきなく(実は心は重いのですが)、私見を述べさせていただきます。

◎谷本誠剛氏の姿勢

当然ながら、私の意見は私個人のものであり、谷本氏の意見と同じではありません。しかしひとつだけ、谷本氏に代わって、お伝えしたいことがあります。

正置氏は、谷本氏の反書評の一文に触れて「大学教師は子どものことも絵本のことも、文庫のおばさんよりもずっとわかっている(中略)という姿勢」「読書活動をしている人へのそこはかとない蔑視」を感じる旨、述べています。これを読んだ人は、正置氏の意図とは別に、谷本氏は「文庫のおばさん」(正置氏の言葉を借りています)

を見下すタイプの大学教授なのであろう、と思うのではないでしょうか。ところがそういう姿勢ほど、谷本氏から遠いものはありませんでした。谷本氏を実際に知っていた方々は、とっくにご存じのことですが、NEWSの読者には氏をご存じない人もいるでしょうから、お伝えします。

谷本氏ほど、「文庫のおばさん」はじめ子どもと直接関わる人たちを大切にしていた人を、私は知りません。谷本氏が主催していた絵本研究会には、大学に籍を置く研究者もいましたが、絵本に興味のある様々なメンバーが集まっていたり、もちろん読書活動をしている人もいました。そして谷本氏がいちばん歓迎し、熱心に意見を求めたのは、そういう現場の声だったのです。

谷本氏は相手がだれであろうと、自分の知らない経験を持つ人たちの話に熱心に耳を傾け、自分も学び、また相手から最上のものを引きだすことのできる教育者でした。谷本氏のそういう姿を惜愛する者にとっては(私もその一人です)、正置氏のコメントは、大変心が痛むものだったのです。

読者の皆さんにぜひ知りたいので、くり返しますが、谷本誠剛氏は「文庫のおばさん」を、「文庫のおばさん」だからという理由で、蔑視するようなところは微塵もありませんでした。逆に現場にいる人々を尊敬し、そういう人たちから学ぼうとする姿勢を生涯保つていました。正置氏のコメントから、読者の皆さんのが事実と正反対の印象を持つ可能性が強く、それはまた正置氏の本意でもないことを思い、このことを記します。

◎書評のあり方

しかしいっぽうで、正置氏をよく知っている私は、正置氏が何の根拠もなく「蔑視」を感じる人でないことも、わかります。では正置氏が感じた「蔑視」は、いったい何に由来するのでしょうか。

それを書く前に、書評のあり方を考えたいと思います。正置氏の書評からは真摯なものを感じますが、『ブックエンド』に掲載されたときには、私も違和感を覚えました。その理由は、正置氏の言うように「書評というものは、ほめ言葉を書くか、内容を紹介するかが、一般常識として通用している」からでは、ありません。私も正置氏と同じように、あり当たりのぬるい書評はつまらないと思っています。特に『ブックエンド』は絵本学会の機関誌なので、必要なときには厳しい意見を述べ合い、大いに論争すべきでしょう。

とはいえた他のメディアならいざ知らず、会員誌で会員の仕事を批評する場合は、どこかでその会員の仕事を励ます姿勢を持っていてほしいと思うのは、私だけでしょうか(「励ます」が言い過ぎでしたら、「同じ志を持つも

のへの最低限の敬意」?)。残念ながら正置氏の書評は、元の本も翻訳に値せず、翻訳紹介の仕方も的がはずれないと、件の本を全面的に否定しており、谷本氏はじめこれに関わった者への励ましともエールとも一切無縁です。

また正置氏の書評は、書評者の自己表現としては問題がなくとも、他の書評(対象である本の良い点を述べています)のあいだに置かれると、『子どもは』が特別に問題のある本であるという印象をもたらします。こうなると批判された相手は、防衛する以外なくなります。正置氏は様々な議論が起こることを良しとされています。しかし正置氏の姿勢は相手をいたずらに防衛させるだけで、かえって議論を封じてしまうもののように思えてなりません。

ここで話をもどすと、私は正置氏を感じた「そこはかとない蔑視」は、「文庫のおばさん」である正置氏に対するものでなく、書評者である正置氏に対して、谷本氏を感じていた苛立ちに所以しているのではないかと思います(正置氏の配慮の無さは、別の言葉で言うと、姑息なところが全く無いということです。正置氏のそういうあり方を、いっぽうで私は敬愛しているのですが)。

◎翻訳に値する本とは?

正置氏の書評の内容については、谷本氏がすでに反論していることでもあり、重複する部分は避けますが、1) 原書は翻訳に値しない 2) 翻訳されたものは原書を曲げているという批判に対して、簡潔に反論を試みたいと思います。

正置氏はあの本は翻訳に値しないと述べていますが、では翻訳すべき本とは何か、ということを考えなくてはなりません。重要な本、ぜひ訳すべき本がそこにあるのに、つまらない本を訳出したというのであれば、これは非難されるべきでしょう。しかし英米の絵本の研究書のなかで、どの本が決定的に重要か、現在のところはまだ混沌としています。どの研究書も帯に短しタスキに長しというところで、急ぎ翻訳すべき本というものは、見つかりません。

このことは、正置氏も私もよく知っていることではないでしょうか。正置氏と私は研究書を共訳したいと考えて、どれを訳すべきか、探し続けていますから(私は正置氏といっしょに仕事をすることを楽しみにしていますが、もうしばらく先のことになりそうです)。検討した本のなかでも優先順位はつけられるでしょうが、出版にあたっては、版権の有無や出版社の意向など、他の要素も入ってくるために、そう厳密に従うわけにはいかないのです。

決定的に重要な本に出会うまでは、訳出をひかえ

るというのはひとつの見識です(これが正置氏です)。しかしとにかく前に進むために、学ぶところのある本を訳出するという態度もひとつの見識です(これが谷本氏です)。どちらの見識が上ということはありませんが、私自身は、20年に一度すばらしい本が出るよりも、どんどん研究書が出てその上で淘汰されるほうが、絵本学会員を益することが多いのではないかと思います。なお『子どもは』は「刺激的な本である」「大変参考になった」などの好意的な書評や意見をたくさん得ていることを、つけ加えておきます。

◎装丁の問題が象徴すること

さて反・反論のなかで正置氏は、件の本が英國版とは表紙が異なることについて、谷本氏の「シリーズ全体の表紙を統一したため」という答えは答えにならないと批判しています。「例えば絵本のシリーズで、表紙(あるいは、装丁)をそろえて翻訳出版していいものでしょうか。表紙の統一ということは理由にならないのではないかでしょうか。このことが『書評という社会的責任』とどう関わるのか、教えてください」とあるので、この疑問にお答えしなければなりません。この装丁の問題は、2) の翻訳が原書を曲げているという批判と関わっているので、少しくわしくお答えします。

現代では、絵本のサイズや装丁はその絵本の一部として、原書にそろえるのが望ましいというのが常識となっています(必ずしも守られるわけではありませんが)。しかし絵本と研究書を同列に考えるのは暴論です。研究書などの一般書が、選書や新書あるいは文庫で出ることを、問題にする人がいるでしょうか。一般書が原書と同じサイズ同じ装丁である必要性は、絵本に比べれば格段に小さいのです。それでも原書にそろえることにこだわれば、書籍の大きさからして異なる日本では、出版してくれる出版社は存在しないでしょう。

正置氏が原書と同じ表紙にこだわるのは、原書の持っている雰囲気が翻訳本では変容していることを批判していることはわかります。しかし仮に『子どもはどう絵本を読むのか』の表紙を原書と同じく、シャーリー・ヒューズの絵にして日本で出版したとしても、大きく変容することに変わりはありません。なぜなら英国人にとってシャーリー・ヒューズは国民的作家と呼ぶべき人なので、その絵を見れば、多くの人々が「あら、シャーリー・ヒューズの絵よ。楽しそうな本ね」と親しみを感じます。日本ではヒューズはまったく人気がないため、反応は「なに、この絵? あんまりかわいくないわね」となります(私はシャーリー・ヒューズの絵本を翻訳出版したいと思い、いくつかの出版社に持ち込みましたが、彼女の絵は日本人には受けないと、どこからも断られた経験があります)。もし同じ反応にこ

だわるのであれば、手塚治虫の鉄腕アトムでも引っぱりだすしかなくなりますが、それは不適当でしょう。

谷本氏が既に述べたことですが、児童文学の研究書を自費出版でなく商業出版するためには、シリーズとするのが有効な手段でした。そして研究書のシリーズが同じ装丁なのは、××文庫が文庫としての統一性を持っているのと同じように統一性をアピールするためであり（その結果、書店や図書館の棚を得やすくなり）、同時に本の値段を安くすることでもあります。正置氏は『子どもは』の定価が高いことを指摘していますが、装丁を変えることでやっとあの値段に押さえているのです。

◎『子どもは』をどう読むべきか

『子どもは』が原書を変容させているという正置氏の批判は、原書をどう読むべきか、せまくとらえすぎていることにも起因していると思います。原書の編者がreal books（絵本）対reading scheme（編纂された教科書）の論争を念頭に置いていたことはまちがいありませんが、『子どもは』はこの論争についての本ではありません。この本の目的は、子どもたちが絵本をどう読むかを分析して、絵本の力について語ろうとしたものです。

正置氏は、この本のわかりにくさを解説するために、『子どもは』の読み方をあたかもただひとつであるかのように、決めつけてはいないでしょうか。研究書もまた、様々な読み方が可能です。そしてどの読み方にスポットライトを当てるのか、原書と翻訳書が違うことは、十分にあります。これは原書への裏切りではなく、二国間の読者の興味の違いによるものです。

そして前書きのひとつの役目は、スポットライトの場所を紹介するところにあるために、日本版の前書きが原書と変わっていても不思議はありません。もちろん原編者であるヴィクター・ワトソン氏に相談し、賛同を得てのことであることを改めてお断りします。ワトソン氏が積極的に賛同してくれた理由は、この本は様々な声を集めたものであるために、様々な読みが可能であるという点がありました。ワトソン氏はバーニンガムの絵本『おじいちゃん』について、「この絵本は、読者が自分で意味を探す絵本であって、できあいの意味を伝えるものではない」と語っていますが（『子どもは』、第6章）、この解説のいくばくかは、研究書である『子どもは』自体にも言えることでしょう。ワトソン氏の本の編集のしかたは、非常にゆるやかであり、日本の読者が英国の読者とはまた別の読み方をすることを、許容するものです。谷本氏はじめ私たち翻訳メンバーは、この点に共鳴して、この本を翻訳しました。

とはいえ『子どもは』はそうわかりやすい本ではありません。これは谷本氏の前書きに問題があるからではな

く、この本自体にわかりにくいところがあるからです。その原因は、ひとつは谷本氏が述べたように、ポストモダンという風潮そのもののわかりにくさであり、もうひとつは様々な声がひとつに収斂されていないところにあるように思います（これがこの本の欠点と言えないこともありません）。

様々な声が収斂されていないことは、しかし収斂されていないがゆえに、パーフォマティブな読みのできるという利点もあります。『子どもは』を購入し、よくわからないと途中で本を閉じてしまった人は、自分が何かに取り組もうとしたときに、または別の場所で疑問を感じたときに、この本の関連のある箇所を再読してみることをお勧めします。例えば子どもの反応を書き記したいと思ったときに（読書運動をしている人にそうしなければいけないと言っているわけではありません。しかし子どもの反応を書きとめ、子どもたちの現場にいない人たちと、それをシェアすることは有意義です）、ワトソン氏の方法は、なかなか示唆に富んでいます。子どもたちに対するワトソン氏のアプローチは、抑制が利いたなかで、子どもたちの反応をよく捉えているからです。正置氏も書評のなかで、こういう読み方ができることを書いておいでです。ただ正置氏の取りあげ方は消極的で「この程度の読み方ならできるだろう」と聞こえますが、私は本書のこうした特徴は積極的に評価されるべきだと考えています。

中川素子氏はこの本を好意的に取りあげて書評を書いてくれたお一人ですが、書評のなかで「この本は（中略）読者が再創造する本といえよう」（週刊読書人、2003年1月31日）と述べています。読者が再創造する本とは、つまりこういう読み方に、さらに積極的な意味を見つけているのではないでしょうか。

◎終わりに

正置氏の書評について、反論を述べてきましたが、公開の場でこういうやりとりがあることはいいことだと思います。それはまた、亡くなられた谷本氏の志に沿うことでもあります（とはいへ論争を嫌い、できるだけ丸く収めようとする風潮があるので、この点では正置氏も私も、少數派の悲哀を囲っていますが）。せっかく俎上に載ったことですし、他の方々も、このやりとりをどう考えたか、あるいは『子どもは』をどう読んだか、発表していただけるといいと思います。これを契機に、実のある論争が起これば、絵本学会の活性化にもつながることでしょう。歓迎・反論ならびにエール。

絵本関係展覧会イベント Information

●軽井沢絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL.0267-48-3340 FAX. 0267-48-2006

<http://www.museen.org/ehon/>

info@museen.org

★動物絵本展=歴史・寓話・物語絵本を中心には

会期：2005年3月2日（水）～6月27日（月）

～紀元前に発祥したイソップからミッフィーまで…動物たちが物語る世界へようこそ～

<展示内容>

1. 動物絵本とは何か

情報絵本と物語絵本…動物絵本の分類

2. 動物絵本の誕生

動物絵本の歴史を紹介

3. 寓話物語の世界

イソップ、ラ・フォンテーヌ寓話について、その歴史と日本ではどのように受容されたのかを紹介

4. 動物絵本の類型

さまざまなパターンの絵本を紹介

5. 動物絵本の技法

擬人法と逆擬人法について

6. 動物絵本と子ども、人間

子どもにとって、人間にとって動物絵本とは何か

<出品作品>

原画：クレーマー「3びきのくま」、ストラットン「跳びくらべ」、ヴィルコン「ぴょんぴょんうさぎぴょん」、

ゲーベアト「長靴をはいた猫」、フォルカード「漁夫と

その妻」、ル・カイン「きつねおくさまの婚礼」ほか

本：『ハバードおばさんと犬のおかしな冒険』、ラッカム『イソップ寓話集』、『万治絵入本伊曾保物語』、ゴーブル『バッファローのむすめ』、エツツ『もりのなか』、

ポター『グロースターの仕立て屋』、ミューラー『ぼくはくまのままでいたかったのに……』ほか

作品点数：約120点

★併設展

欧米絵本のあゆみ～特集：空の絵本～

会期：同上

作品点数約70点

●エルツおもちゃ博物館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

電話0267(48)3340 fax.0267(48)2006

info@museen.org

★ドイツ・子どもの世界展=おもちゃと本から眺める森の国=

会期：2005年3月2日（水）～10月10日（月）

作品点数：約500点

<内容>

<A展示室>

☆絵本の中に描かれたドイツのおもちゃたち

絵本の中に登場するドイツのおもちゃを紹介します。
くるみ割り人形／天使と坑夫／ドールハウス／
テディベアほか

<B展示室>

☆おもちゃとして息が吹き込まれたモチーフ

聖書の物語や童話がテーマとされ、おもちゃとして
再現された作品を紹介します。
クリッペ（キリスト降誕）／ノアの方舟／復活祭の
うさぎ／グリム童話ほか

<C展示室>

☆子どもたちが遊んできたもの

ヨーロッパの子どもたちが遊び道具としてきたもの
を絵本、おもちゃによってたどります。

ABCを学ぶための本／積み木／紙のおもちゃ／木の
おもちゃ／すずのおもちゃ ほか

☆ドイツのクリスマス

盛大かつ厳肅に祝われるドイツのクリスマス風景を
再現します。

クリスマスプレゼント（さまざまな色や形の知育玩
具）／ボビンレース編みなどエルツ地方に伝わる民
芸品／クリスマスの風物詩（クリスマスに欠かせな
い飾りや風物詩を紹介）／クリスマスマーケット
(にぎやかなクリスマス市を再現)

●大島町絵本館

〒939-0283 富山県射水郡大島町鳥取50

TEL : 0766-52-6780 FAX : 0766-52-6777

<http://www.iijnet.or.jp/ehonkan/>

★南塚直子絵本原画展

アンデルセン生誕200年を記念して「おやゆびひめ」の
原画を展示。まだ・みちおさんの詩に南塚さんが絵を
付けた「たんぽぽヘリコプター」の原画もあわせてお
楽しみ下さい。

とき：4月1日（金）～5月29日（日）

展示原画：『おやゆびひめ』『たんぽぽヘリコプター』

★創作教室

絵本館の創作教室は誰もが楽しめるモットーに
した「つくる」教室です。絵や工作は苦手…という人
でもだいじょうぶ！ご家族みなさんで参加して見ませ
んか？ 家族登録募集中！

2005年5月～2006年3月（毎週第4土曜日／日曜日）

- 1) 土曜日 午前 10:00～12:00
- 2) 土曜日 午後 14:00～16:00
- 3) 日曜日 午前 10:00～12:00

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL 03-3995-0612 / テレフォンガイド 03-3995-0820

FAX 03-3995-0680

<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

★開館25周年を迎える、東京のちひろ美術館が生まれ変わりました。美術館が建つ練馬区下石神井は、いわさきちひろが最後の22年間を過ごし、絵を描きつづけた場所。新生「ちひろ美術館・東京」はちひろの生きた時間と美術館の25年を大切にしながら、公開スペース2倍の、全館バリアフリーの建物に変わりました。ちひろ愛用のソファに座って絵が観られる展示室、より忠実に復元されたアトリエやちひろの愛した草花が咲く「ちひろの庭」など、ちひろの思い出があふれる美術館です。

★中村梧郎講演会「枯葉剤の30年—母は枯葉剤を浴びた—」ベトナム戦争終結30年を経た今もなお、「枯葉剤」によるダイオキシンの問題は深刻です。ごみ焼却によるダイオキシンや環境ホルモン問題にも長年取り組んできたフォト・ジャーナリスト、中村梧郎氏のスライド＆トークを通して、この身近な問題について一緒に考えてみませんか。

日時：5月28日(土)17:00-18:30

会場：ちひろ美術館・東京 多目的展示ホール

定員：100名(要予約)

参加費：講演会のみ500円

*講演会の参加者で、開館中（10:00～17:00）に展示をご覧になる方は、受付でお申し出下さい。通常の入館料から100円引きとなります。

*キャンセルの場合は、必ず事前にご一報下さい。

★えほんのじかん

毎月第2・4土曜日に開催している「えほんのじかん」は、展示や季節にあわせた絵本の読み聞かせ、素話や手遊びなどをを行っています。今会期中（3月1日～5月15日）は、「いわさきちひろ アンデルセンへの旅」展にちなんで、第1・3土曜日も開催します。（予約不要）

*第2・4土曜日は「ねりま子どもと本ネットワーク」のみなさんによる読み聞かせや素話を行います。

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL. 0261-62-0772 / テレフォンガイド 0261-62-0777

FAX 0261-62-0774

<http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm>

★展示室

・5/13（金）～7/5（火）

[展示室1]ちひろと信州

[展示室4]<企画展>赤羽末吉・鬼の絵本展

・7/8（金）～9/13（火）

[展示室1]ちひろの夏休み

[多目的ギャラリー他]<企画展>一虹がいっぱい—吉田重信展

・9/16（金）～11/29（火）

[展示室1]H.C.アンデルセン生誕200年記念 ちひろが愛したアンデルセン

[展示室4]画家たちが愛したアンデルセンとグリム

・ギャラリートーク：毎月第2・4土曜日14:00より。

・おはなしの会：毎月第2・4土曜日11:00より。

★イベント

・5/22（日）、6/5（日）、6/19（日）

スライドトーク「ちひろと信州」

5/13～7/5まで開催する展覧会「ちひろと信州」に関連し、ちひろにとって大切な土地である信州とのゆかりや思い出などを、作品や写真をスライドで紹介しながら、分かりやすくお話しします。

・7/8（金）吉田重信公開制作「虹ヲアツメル」

企画展「一虹がいっぱい—吉田重信展」の作家・吉田重信氏が、水と鏡を使い、太陽光を集めて虹を作る公開制作を行います。（見学自由・雨天順延）

・7/9（土）吉田重信公開授業「虹がいっぱい」

吉田重信氏を講師に迎えて、松川中学校の生徒とともに美術館内外に虹をつくる公開授業を行います。

・7/30（土）、7/31（日）

安曇野アートラインサマースクール

・中学生ボランティア

夏休み期間中には、地元の松川中学校の有志が、ちひろの水彩技法体験や、吉田重信展に関連した美術館の様々な教育普及活動に、ボランティアとして参加します。

・10/23（日）秋の夜長の安曇野寄席

出演：遊興亭福し満 ほか

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1

TEL 0266-24-3319(ミミズク) FAX 0266-21-1620

<http://www.ilf.jp> (URLが新しくなりました)

★絵本作家30周年記念 黒井 健 絵本原画展

4月23日(土)～6月29日(水)(最終日は午後5時閉館)

場所：2階第1企画展示室

★岡谷市内を彩る武井武雄の作品展

4月23日(土)～7月6日(水)

岡谷市内で街路灯などに使用されている武井武雄作品の原画展

場所：3階武井武雄作品展示室にて
※期間中、バスツアーなどを企画

●世田谷文学館

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10
TEL03-5374-9111 FAX03-5374-9120
<http://www.setabun.or.jp/>

★世田谷文学館開館10周年記念

「宇野千代展一書いた、恋した、生きた。」
会場：世田谷文学館 1階企画展示室
会期：平成17年4月29日（金・祝）～6月12日（日）
開館時間：午前10時～午後6時（入館は5時30分）
休館日：毎週月曜日
観覧料
一般：600（480）円
高校・大学生：350（280）円
小学・中学生：250（200）円
65歳以上：300（240）円
＊（ ）内は20名以上の団体料金、障害者割引制度あり
＊展覧会初日の4月29日は全ての観覧料が無料
主催：（財）せたがや文化財団 世田谷文学館
後援：世田谷区／世田谷区教育委員会

●ワイルドスミス絵本美術館

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原9丁目101
TEL：0557-51-7330 FAX：0557-51-7331
<http://www.metm.co.jp/>
brian@metm.co.jp

★とり・とり・ことり展

3月17日（木）～9月13日（火）
2階展示室2にて
ワイルドスミスが描いたさまざまな「とり」の作品をご紹介いたします。
出展作品：『とり』『お月さまのさんぽ』"Animal Seasons"等14作品の絵本とポスター原画から計21点

☆1階展示室「色彩の魔術師の足あと」展

ワイルドスミスの画業41年を振り返り、年代を追いながら作品や彼の言葉を展示します。
出展作品：『ワイルドスミスのABC』『マザーグース』等22作品の絵本と初期イラスト、ポスター原画、キャンバス画から計42点

☆2階展示室1

「ちいさなえほん～ミニブックシリーズ～」展
通常より小さめの絵本は、言葉が少なく、よりちいさなお子様にもお楽しみいただけます。

出展作品：『なんてきこえる』『おちたのだあれ』等6作品の絵本から計30点

★巡回展「おとぎの国のファンタジア」

去年に引き続き、ブライアン・ワイルドスミスの画業40周年を記念した大規模な展覧会が、第2弾では全国17ヶ所を巡回いたします。

- ・5月25日（水）～6月5日（日） 熊本県 鶴屋百貨店 東館7階 鶴屋ホール
- ・6月10日（金）～6月23日（木） 島根県 一畠百貨店 松江店6階 催事場
- ・7月22日（金）～7月30日（土） 京都蚕業会館コムスホール5階 催事場

●世界のバリアフリー絵本展

巡回最終展示＆特別企画のお知らせ

★「読書の楽しみをすべての子どもたちに」

～バリアフリー絵本展とシンポジウム～

子どもの本の歴史は、「子ども」を時代がいかに見てきたかの歴史でもあり、今の絵本が子どもにどのようなまなざしを向けているかの実証でもあります。いいかえれば、「子どもの本」をつくることによって、子どもの人権を育ててきた歩みがあり、その視点から見ても、まだ明確な権利を持っていないのが、「障害」のある子どもたちのための本ではないでしょうか。この展示及びシンポジウムによって、バリアフリー絵本の社会的認知を高め、図書館サービスにおけるさまざまな課題について考える機会を提供したいと思います。

主催：国立国会図書館国際子ども図書館

（社）日本国際児童図書評議会 JBBY

場所：国立国会図書館国際子ども図書館 3階ホール

日時：

（1）シンポジウム

2005年7月20日（水）

（国際子ども図書館資料整理休館日）

事前申し込み必要（来館・往復はがき・Eメールで下記問い合わせ先へ）

（2）展示IBBY50周年記念「世界バリアフリー絵本展」

2005年7月21日（木）～24日（日）

（7月20日（水）はシンポジウム参加者内覧）

（3）展示「日本の障害のある子どもたちのための本の歩み」

2005年7月21日（木）～9月4日（日）

（7月20日（水）はシンポジウム参加者内覧）

内容：

（1）シンポジウム

日本では、困難が多く出版も普及も進んでいない障害の

ある子どもたちの本について、スウェーデンのLL協会（やさしく読める図書基金）の取り組みに学びながら、国内関係者とともに、具体的一步を進める方策を探る。

・13:00-14:30

講演 ブロール・トロンバッケ氏 (Mr. Bror Tronbacke)
(スウェーデン やさしく読める図書基金所長)
「LL協会の出版の取り組みと図書館の障害児サービス」

・15:00-16:30

国内関係者によるシンポジウム

パネリスト：

山内 薫氏 (東京都墨田区緑図書館)

－日本の障害のある子どもたちへの図書館サービスの歴史と展望

脇谷邦子氏 (大阪府立中央図書館)

－大阪府立中央図書館の取り組み

鴻池守氏 (編集者)

－数多くの障害児関係図書の出版を手がけられた経験をふまえて

出版の現状と問題点

ふきのとう文庫代表者 (ふきのとう文庫 (北海道))

－障害のある子どものための本作りと普及

コーディネーター：

攬上久子氏 (世界のバリアフリー絵本展実行委員長)

16:30～17:00 ディスカッション

(2) 展示IBBY50周年記念「世界バリアフリー絵本展」
日本国際児童図書評議会 (JBBY) が、IBBY障害児図書資料センターから資料を借り受け2003年から巡回展示を行ってきた「世界バリアフリー絵本展」の国内最終展示。

(3) 展示「日本の障害のある子どもたちのための本の歩み」

日本における障害児向け図書の歩みを振り返り、年表と歴史的重要貴重本の展示

◎お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49

TEL 03-3827-2053 (代表)

FAX 03-3827-2043

<沖縄県名護市国際交流親善委員会>

[日時] 5月20日 (金) ~30日 (日) 月曜日休館

火～金 10:00～19:00

土・日 10:00～17:00

[場所] 名護市立中央図書館

沖縄県名護市宮里5丁目6番地の1

最寄のバス停「宮里3丁目」から徒歩5分

[連絡先]

名護市国際交流親善委員会

担当者 岸本能子 仲里幸一郎

TEL 0980-51-0123 FAX 0980-51-0325

★

<ふきのとう文庫 (北海道札幌市)>

日時：2004年6月23日(水)～27日(日)

場所：かでる 27 1F 展示ホール

〒001-0000 札幌市北2条7丁目

JR・地下鉄札幌駅 徒歩12～3分

連絡先：ふきのとう文庫 011-665-4835

★

<日本ユニセフ協会 水戸の会>

日時：7月6日(火)～11日(日) 9:00～20:00

10日 11日 9:00～17:00

場所：茨城図書館 エントランスホール

〒310-0011 水戸市三の丸1-5-38

JR水戸駅 徒歩5分

連絡先：日本ユニセフ協会水戸の会 029-254-4361

★

<金沢市立泉野図書館>

日時：7月10日(土)～26日(月)火曜日休館

平日10:00～10:00 土日祝10:00～17:00

場所：金沢市立泉野図書館

〒921-8034 石川県金沢市泉野町4丁目22-22

JR金沢駅より路線番号30, 31のバスに乗車(約25分)「泉が丘」バス停下車徒歩5分

連絡先：金沢市立泉野図書館

TEL076-280-2345 FAX076-280-2342

事務局からのお知らせ

● 絵本学会研究紀要『絵本学』第8号投稿論文募集について

絵本学会研究紀要『絵本学』第8号への投稿論文を、次の要領で募集します。ふるってご応募下さい。なお、執筆要領には別に詳細がありますので、投稿希望者は、事務局に請求、取り寄せの上、それに従って原稿を作成して下さい。

★ 絵本学会研究紀要「絵本学」投稿規程

◎ 投稿資格：絵本学会会員および準会員

◎ 内容：絵本に関する研究論文、報告、論説、研究ノートで、未発表のもの

◎ 掲載採択：査読に基づき、編集委員会が掲載の採否を決定する。必要に応じて編集委員会の外に査読委員を依頼する場合がある。採否判定の過程・理由は開示しない。ただし、投稿者は、結果について説明を求めることができる。この場合、編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

◎ 投稿締切：2005年9月30日（金）（必着）

◎ 掲載採択通知：2005年12月15日までに投稿者へ通知する

◎ 刊行：2005年度内

◎ 原稿送付先：絵本学会事務局（郵送とする。ファックス、電子メール等による送付は不可）

★ 絵本学会研究紀要「絵本学」執筆要項

【基本事項】のみ抄録

◎ 使用言語：日本語

◎ 原稿体裁：必ず完成原稿であること。原則として、ワープロによる横書き。表紙に原稿の種類（研究論文・報告・論説・研究ノート、いざれかを記載）題目（和文・英文）、執筆者氏名（ローマ字を併記）、所属機関・専門分野を明記のこと。

◎ 原稿分量：原則として1篇につき、研究論文は、横23字×縦44行、2段組で、4頁から8頁、文字数にして8000字から16000字まで、報告・論説・研究ノートは4頁（約8000字）以内。

◎ 抄録分量：論文要旨を、横27字×縦15行、文字数にして約400字程度で記述。掲載決定後、横10語程度×20行、単語数にして約200語程度の英訳を提出。

◎ 図版：モノクロを原則とする。（カラー図版の場合、経費は投稿者の自己負担とする。編集・印刷の都合で、図版は各論の末尾部に配置する。本文中への挿入はできない。使用する図版数は特に限定しないが、本誌4頁以内に納まるものとする。図版のキャプションは一括して別紙にまとめ、番号順に記載する。なお、図版が多数ある場合、編集委員会において調整をすることがあるので、

キャプション原稿には整理番号のほかに、掲載希望順（重要度）の番号を付すこと。図版原稿は、汚損の無いよう保護し、各々に番号（図〇、表〇、など）のみを付す。（図版の明示方法については【図版（図、写真、表など）】の注意事項を参照のこと）

◎ 著者校正：原則1回のみ。文字変換ミスの修正など最低限の訂正のみとする。

◎ 進呈：執筆者には、抜刷30部と、掲載誌5部を無料進呈する。

◎ 提出物：次の2点を提出すること。

1) プリント原稿3部

（図版原稿、および図版のキャプション原稿を含む。コピー可）

*図版原稿（使用する場合）はデジタル化せず、写真またはカラーコピーを提出。

2) 原稿を入力したディスク

（FD、CD-R、いざれかのディスクで、ファイル形態はWindowsまたはMacintoshのテキストファイルとする。ディスクのラベルには、論文名、氏名、使用したOS、機種、メーカー、アプリケーションソフト名を明記する。）

● 研究助成について

今年度も絵本研究に関する研究会などグループの活動を助成します。助成金は、一件あたり30,000円とし、平成17年度は、3件について助成します。助成を希望するグループは、研究テーマ・研究の概要・研究代表者および構成員・発表の形態を明記し、2005年6月30日（木）までに（必着）絵本学会事務局宛に郵送してください。結果は、運営委員会・理事会で審査の上お知らせします。

● 運営委員会

2005年2月27日 運営委員会

会場：板橋区企業活性化センター第3研修室

議題：

1. 前回（2004年12月18日）の議事録の承認

2. 第8回絵本学会大会（2005年度／京都造形芸術大学）について

大会実行委員会事務局佐藤さんより大会案が提示され、とくに大きな修正はなく承認された。主たる確認事項は、1.講演会講師・イシュトバン・バンニヤイ氏に係る経費は、主催大学より提供される。2.学生（中・高・大）参加費は1000円とする。3.京都市内の大型店舗において、本大会に協賛するブックフェアを行う。そのため、店舗にB5版程度大会についての広告ビラを置くことが報告された。また、本大会との関わりで展示することの望ましい絵本のリストを、生田さんが窓口になり佐藤さんに送付することが決まった。

3. 機関誌「BOOK END」について
 「出版・販売についての契約書（案）」が提示され、一部が修正されたのち承認された。今後も、フィルムアート社との協議が行われることが承認された。
4. 機関誌「BOOK END」3号について
 三宅機関誌編集委員長より、3号の内容が報告された。
 ・韓国絵本の特集（イ・ホベクさんの第7回大会における講演内容）、・和歌山静子のアジア絵本コレクション、・絵本ブックリスト特集、・2004年度の絵本座談会（年度ごとの絵本の総括や新刊絵本の傾向など）、その他。発行予定は5月末頃。
5. 紀要「絵本学」7号について
 三宅紀要編集委員長より、7号の内容が報告された。
 ・論文3点。・絵本研究文献リスト。
6. 絵本研究講座について（資料3）
 2004年の12月に行われた絵本研究講座の収支と講座の状況が報告され承認された。
7. 会則改定について
 役員の継続年数や年齢の制限などを中心とした会則の改定が進められており、会則改定のための検討委員会の委員候補として、4人の方々が候補としてあげられた。3人の委員が必要なので、この中から、今井会長が3人を指名することが承認された。次回の絵本学会大会で新会則の承認が必要なので、それまでに成案を作るが、委員会細則はその後でもよいことになった。
8. その他
 ニューズレターの「書評」を巡る記事掲載に関する議論がなされた。
 次回運営委員会の日程は、2005年4月10日（日）の予定。

2005年4月10日運営委員会

日時：2005年4月10日（日） 午後1：30～

会場：板橋区企業活性化センター 研修室

議題：

1. 前回記録確認
2. 第8回（2005年度）絵本学会大会について
 研究作品発表応募状況の報告、プログラムの詳細などを確認
3. 第8回絵本学会総会について
 04年度活動報告、04年度決算、05年度活動計画、05年度予算などの案について検討
4. 機関誌『BOOK END』について
 3号の内容進捗状況について報告、FA社との契約について検討、3号の進行も参考にして内容を詰め、早期に契約を結ぶこととする。
5. 紀要『絵本学』7号について

- 編集進行状況の報告。近々完成。
6. 会則改定について
 三宅興子、松岡希代子、竹迫祐子の3氏に委員を依頼。
7. その他
 ・絵本フォーラムについて
 7月30日（土）世田谷文学館。
 ・ニュース24号について
 ・次回の予定。5月22日（日）

●理事会

2005年4月10日理事会

日時：2005年4月10日（日） 午前12：00～

会場：板橋区企業活性化センター 研修室

議題：

1. 前回記録の確認
2. 第8回（2005年度）絵本学会大会について
 研究作品発表応募状況など
3. 第8回絵本学会総会について
 04年度活動報告、04年度決算、05年度活動計画、05年度予算など
4. 機関誌『BOOK END』について
 FA社との契約について
5. 紀要『絵本学』7号について
6. 学術団体登録について
 日本学術会議で登録学術研究団体制度が廃止。今後は情報収拾に勤める。
7. その他

◎4月10日分の運営委員会理事会の議事録詳細は次号に掲載予定です。